

第21回 万国地質学会 の様子とおもな決議

地質部長 齊藤正次

だいたい4年目ごとに催される 世界の地質学者の祭典ともいえる万国地質学会 (International Geological Congress) は 学術の国際会議のうちで歴史の最も古いものの1つで 今回はその第21回目にあたり デンマーク・スウェーデン・ノルウェー・フィンランドおよびアイスランド すなわち 北欧の通称 Norden 5カ国の共催で開かれた。

近年国際航空の発達によって 急に欧州の門戸の1つとなった 美しい国際都市 デンマークの首都 **コペンハーゲン** が会合の場所になり 昨1960年8月16日から24日にわたって会議が催され また会議の前と後には **地質見学旅行** が それぞれ50班ほど編成されて デンマーク国内はもちろんのこと スカンジナビアのすみずみから さらに遠く北極圏に近い白夜の島々アイスランド・スピツベルゲンにまで用意された。

会議に世界中から参集した学者は約2,000人 それに伴った家族が 約1,000人といわれる多人数で ために一般民家まで宿舎に動員する状態で 8月16日の開会式などは さしもの広いコペンハーゲン体育館の式場もいっぱいになるほどであった。 日本からは東京大学の小林貞一教授を首席代表として直接渡航した人 在留中の海外から臨んだ人を合わせて大学関係13名 原子燃料公社1名および地質調査所から筆者の計15名に達した。

各国の学者が研究成果を競って発表する **講演会** がもちろん会議の主体であった。 講演会は先カンブリア系・古生界下部・氷河問題を含む第四系・花崗岩-片麻岩・ペグマタイト・構造地質・造山運動・鉱床の成因・地球化学など北欧の地質に関係の深い諸問題から ウラン鉱床・地質絶対年代の決定・海底地質などの新興トピック その他を含めて21の分科に分かれて実施され これ

らに対し 古生界上部・中生界・第三系・火山岩など日本では親しみの多い問題が やや手薄のようにみえたなどいかにも北欧での会議らしい空気が味われた。

講演会とは別に 地質図・層位学・地質文献要約集などについての **国際委員会** 古生物学・堆積学・鉱物学・粘土鉱物研究・水理地質学・地球化学などの **国際集會** も同時に開かれた。 かような講演会の諸分科や種々の国際委員会・集會は 毎日いくつものが場所を違えて相重複して進められ このため一人ではもちろんのこと日本からの参加者の臨んだものを皆集めても 全部聞けたとはいえないほどであった。 ただし 講演会ならびに古生物学集會のすべての講演は あらかじめ原稿が集められて会議報告 (Report) として手廻しよく印刷が終っており 会議開催と同時に配布されたので これを読めば内容は知ることができる。

国際委員会のうち **地質図委員会** は 全世界の地質鉱床図を作成しようとするものであって 最近では昨年4月東京で開催されたE C A F E (アジア極東経済委員会) の地質部会で論議されてきたアジア地域の地質図類作成業務と直接につながるものである。 作成しようとする地図類のうち **地質図** については 地区ごとに逐次出版されつつある状態で 学問上はさして論議は無かった。

活発に討論されたのは **構造地質図** についてであり ことに国を接する欧州諸国の地質学者の間では たとえば 構造帯の国際的対比などにつき学術的な意見の交換が盛んに試みられ 別にアメリカ・アフリカ・ソ連圏などの構造地質図も紹介され説明された。 ここに留意すべきことの1つは 構造地質図の作成に際しては 地球物理学上のデータをも同時に考慮すべきことが推奨されたことである。 鉱床図類の作成もこの委員会の業務に

なっている。地質図の上に鉱床の位置をプロットして作るいわゆる**鉱床分布図**については本質的な困難は少なく各国とも作業が進んでいる。

しかしながら理想的な**鉱床図**と考えられている**鉱床生成区図**については少数の国で素案が用意されている程度でまだ国際的な共通性をもった作成原理を論じるまでには進んでいない。よって差当りは個々の国々であるいは隣り同志のいくつかの国々が組になって各自試案を作ってやがてこれらを持ち寄って討議しようという申し合わせになった。

日本からは**鉱床生成時代**ごとに別々の図を作って会議に提出したのであるがこのやり方はどの国でも気が付かなかった1つの着想として注目をひいた。

他の国際委員会で申し合わせのできた事からのうちめぼしいもの2、3を次に述べておく。

層位学委員会では古生界の層序を下からカンブリア・オルドヴィス・シルリア・デヴオン・石炭・二疊の各系に分けることが確認された。というのは今まで日本でよく使われてきたゴトランド系という呼称はシルリア系の中に含まれることになって使う必要がなくなったしまた国際的に一時問題になりかけた石炭系を2つの系に分ける学説は賛成が得られなかったことを意味する。

地質文献要約集委員会では近くその刊行物 *Geological Abstract* が発刊されることが報告された。これは英文の要約を付けた国際的地質文献目録であり各国が自国の分を分担して原稿を用意しこれを英国にある本部が集めて整理しかくて今後定期的に刊行されようとするものである。

学術上の諸会合がすんだあと毎夕運営上などの議題を審議する評議会が開かれた。この会は地質学会参加者のうち各国の学会・地質調査所などの機関を代表するもの全員を含めて構成されるものである。おもな議決

は次の2項であった。

次回の万国地質学会の主催国はインドにきまり1964年夏が会期に予定されるに至った。インドのほかにニュージーランドからも是非にとの招請があり決定はやや難航したがついに投票の結果インドが選ばれた。なおその節にはアフガニスタン・セイロン・パキスタンが地質見学旅行などでインドに協力するはずである。

万国地質学会を従来通り尊重しながらこれとは別個に**国際地質学連合**—仮称—(**International Geological Union**)を設立する準備が進められることになった

万国地質学会はその都度開かれる一時的のものでかつ開催国の予算でまかなわれるのに対し**国際地質学連合**は常置機関としかつ財政を各国の分担に期待するもので **I.C.S.U.** (**International Council of Scientific Unions**) の傘下に属すべきものである。

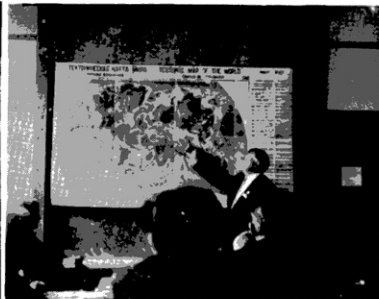
その事業内容とくに従来の万国地質学会との関係財政問題などにつき論議され直ちに設立すべきか設立すべからざるかあるいは今しばらく検討すべきかの3案があったが世界の大勢は直ちに設立に歩み出すべき意向にあった。よってこのための組織委員が指名され近くこの委員によって会則の原案が用意され各国の受入れ機関に通達されて意見が徴せられることになっている。

なおこの連合が設立された暁には**世界地質図**・**層位学**(これには**世界地層名辞典**・**層位学用語集**などの編集・刊行をふくむ)・**地質文献要約集**など常時経費を必要とする国際委員会はこの方に委譲されようである。

万国地質学会は誰でも所定の手続を済ませば個人の資格でも参加できるものである。しかしながら今回の会議の内容をみても国の代表として振舞わなければならないような事からもある。外国のむしろ多くの国々からの参加者は国の代表としての用意をもあらかじめ持って会議に臨んでいたように感じられた。



会 議 場



地 質 図 委 員 会



ノルウェー中部トロンハイム地方の地質見学旅行